

支援の必要な子どもの思いを理解するために
～保育の中での支援と配慮～

姫路市立つくし児童園
保育主任 藤原 千恵

【はじめに】

私が今まで保育園や幼稚園等への訪問で出会った子ども達の中には、マイペースで集団活動に入れず、友達とトラブルになることも多い、先生から見ればいわゆる「困った子」として園での対応に苦慮されているケースが多く見られた。

しかし、その子どもは本当に「困った子」なのか、理解してもらえず「困っている子ども」なのではないか、という視点で、その行動の裏に隠れている“子どもの思い”を探っていきながら、子どもへの理解を深めていきたいと思う。

【具体的な子どもの姿から】

① 集団行動に入りにくい

集団行動に入りにくい子どもの思いとしては、

- ・一斉に呼びかけられると、自分に言われていると気づかない
- ・言葉だけの指示で聞き逃してしまい、何をするのかわからない
- ・していることに夢中で、みんなのしていることに気づいていない

などが考えられる。

まずは子どもの気持ちがどこに向いているのか、今どんな気持ちでいるのかを確認することが大切と考える。その上で、クラス全体への呼びかけの後で、子どもの気持ちに寄り添

う声かけをする、個別にその子に伝わりやすい方法で「今から〇〇するよ」と伝えることが大切である。発達が気になる子どもには「聞くを見る」という特性が見られるため、今からすることが「見てわかる」ように伝えることを意識していくことも大切である。

- 例)・集いで使用する絵本など実物を見せる
・今から行く場所の写真やイラストを見せて誘う



★写真スケジュール

その際、必ず伝わっているかどうか確認することが重要である。大人が伝えたつもりでも子どもに伝わっていないこともあるので、丁寧に予告することが、子どもの気づきや見通しを持って参加することに繋がるのではと考える。

あきちゃんのよてい

おかあさんや せんせいげ かくよ

かつ	げつようび	かようび	ずいようび	もくようび	きんようび	どようび	にちようび
あき①	つくし	つくし	つくし	まなべ せんせい	つくし	どうぶつ おうち	おうち
②		たんじゆび	つくし				
ひる	りばー してい	ばす	ばす	おうち	おうち	おうち	りばー してい

★週間スケジュール

② 生活の区切り目や予定変更で混乱する

「おしまいするよ」の声かけで大混乱になる子どもの思いや手立てについて考える。

遊びに夢中になっている子どもは、次の活動があるから、時間が来たからと、急に遊びを中断されてしまったら、どんな風に感じるのか。もっと遊びたい！あともう少しで完成するのに・・・とっていたり、次に何が始まるのかわからなくて混乱していたりするのかもしれない。

混乱して暴れてしまう子どもは、自分でわざと混乱しているわけではない。そうすることでしか、自分のしんどい思いを表現できないのかもしれない。そう考えると、混乱する姿＝「ヘルプサイン」として捉え、受け止めていくことがとても大切なのではないかな。

- ・子どもの行動だけにとらわれず、その前後にあった出来事は何かを探る。
- ・暴れてしまう時はケガの無いよう安全確保する。
- ・子どもの気持ちに寄り添うかわりをする。
- ・原因がはっきりしていれば、その原因となることを排除したり、場所を移動するなどしたりしてクールダウンできるようにする。

混乱している時は話しても聞けない状態なので、話が聞ける状態に落ち着くまで待ち、気持ちを引き取った上で話をする方がよいと考える。

安心して気持ちを切り替えられるように、

- ・子どもにとってわかりやすい「区切り」を子どもと相談して決め、約束する。

例)「10数えたらおしまいしようか」

「ここまでできたらおしまいしようね」

- ・「次は〇〇だよ」とその子にとってわかりやすい予告、伝えをする。

例) 言葉は短く丁寧に

関連するグッズ、写真、絵カード、文字などを見せる

など、子どもが納得して今していることに区切りをつけ、次の活動に向かえるように支援していきたい。

③ 友達と一緒に遊ばない、一人で遊びたい

なかなか友達の輪の中に入っていかず、一人で遊んでいる子どもの思いを探り、手立てを考えていきたい。

- ・ 自分のペースで遊びたい？

落ち着いて取り組める場所と時間を保障していく。

- ・ 友達の行動が予測できず不安？

おもちゃを取られる、邪魔をされるなどと勘違いしている可能性があるため、友達の様子や思いを解説し、安心できるようにする。

- ・ どうかかわっていいのかわからない？

大人が仲立ちとなって関わり方を伝えていく。一緒に参加できなくても、見ているだけでも参加していると捉える。

それ以外にも子どもの行動の裏にはさまざま

な思いがあるということを心に置いて、子どもの思いに寄り添い理解する必要がある。

④ こだわりが強い

ひとつのものに固執したり、何か持っていないと気がすまないなど、大人から見れば「こだわり」と捉えがちな姿について考える。

- ・同じことばかりしている

＝変化への不安

- ・次のことに切り替わりにくい

＝見通しがたたないことへの不安

- ・好きなことに偏り（執着）がある

＝知っていることへの安心

こう考えると、こだわりが強い＝不安要素が強いということである。こだわりがあることで、生活に支障をきたしたり、自他ともに危険を伴うものは回避していかなければいけないが、そうでなければまずは不安要素を解消することで、こだわりが和らぎ、生活しやすくなると考えられる。不安要素を解消するためには、

- ・大人が支えになり変化を受け入れる
- ・先の見通しがもてるような予告
- ・「こんなこともある」というバリエーションを伝える

という、子どもの気持ちに寄り添い支えるということが大切で、その行動だけをピックアップしても何の解決にもならないのではないかと思う。

⑤ 奇声、自傷他傷がある

保育中に急に奇声を上げたり、うまくいかなくて自傷してしまう子どもの心の中を考えてみる。

- ・不安なことへの防衛反応

- ・周りのざわざわした音を自分の声でシャットダウン

- ・自分の思いをうまく表現できない

- ・大人の注意を自分に向かせたい（注意引き）

- ・自己刺激（声を響かせる）

その他さまざまな思いがある上での行動として捉えると、子どもの行動には必ず理由があるということ、その理由を周りの大人が汲み取って対応していくことが大事である。

また自傷、他傷をする子どもがなぜそのような行動をするのかというと、コミュニケーションの困難さからくる行動であると考えられる。

- ・うまく伝えられない、伝える表現方法を知らない

- ・思いをわかってもらえない（注意引き）

- ・失敗して嫌な気持ちをどうしていいかわからない（だから近くの人、物にあたる）

- ・過去の嫌なことがフラッシュバック

- ・感覚刺激

このような子どもの思いを周りの大人がどう受け止め対応するかで、行動は増減する。子どもの特性やその前後の状況をしっかりと捉え、子どもの思いを汲み取り適切に対応していくことが求められる。今後の子どもの人生においても重要になると考える。

また子どもが安心して過ごせる環境設定が重要である。例えば集いでは、子どもが注目しやすい景色になっているか、玩具の居場所が定まっているかなど、環境の工夫をすることで、子どもは安心して生活できるのである。



★背景をシンプルにすることで注目しやすく



★自分の棚はどこか、色分けでわかりやすく



★おもちゃの「居場所」を写真で示す

⑥ 生活面での自立が進まない（偏食等）

生活面の自立に向けては、子どもが気づいているかどうかポイントになってくる。トイレは排尿する所、と理解しているか、尿が出る感覚に気づいているか、もし気づいていない段階であれば、いくらタイミングをはかってトイレに行っても、なかなか成功しな

いことが多い。

着脱については、脱ぎ着する時に協力動作があるか、自分でできる部分はどこかなど見極めることで、必要な支援が考えやすくなる。生活面での自立は、焦りは禁物。子どもの気づきに添って、丁寧に積み重ねることが大切である。

偏食については、日々悩まれるところである。大事なことは、好き嫌いは調理形態や味の工夫で克服できることがあるが、偏食は頑張っただけで克服できるものではないということである。

偏食の理由としては以下のことが考えられる。

- ・感覚（食感、味）のかたより
- ・初めてのものへの拒否、決め事による拒否
- ・食事場面への混乱や拒否

（ざわざわした雰囲気、強制的に食べさせられた経験）

例えば、大好きなソーセージであっても、たこの形に切つてあるともうそれはソーセージではない、という風に見た目での受け入れ幅が狭く、拒否になってしまうことが見られる。食事は、人が生きていく上で欠かせないものであるが、食事にだけスポットをあてても偏食の解決にはならない。偏食があっても発育や健康に大きな影響が見られないのであれば、さほど気にしなくてもよいのではないかと考える。偏食対応とともに、生活上の不安や困りごとの軽減への取り組みをすることで、遊びや興味の幅を拡げ、食事への受け入れ幅も広がっていくことになる。

保育所保育指針の「健康」の項目には、「子どもの食生活の実情に配慮し、和やかな

雰囲気の中で保育士等や他の子どもと食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食物への興味や関心を持ったりするなどし・・・」とある。偏食があっても、子どもが食べることを楽しみに食事に向かえることを大事にしていきたい。

【具体的な支援方法】

発達が気になる子どもへの支援で取り入れられることが多いのは“視覚支援”である。前述したように、発達が気になる子どもは聞くよりも見る方が情報として残りやすいため、視覚情報を用いて伝えることで、安心して生活できる。



★おかわりの回数をカードで示し回数を調整しかし、視覚支援を大人が自分の思うように子どもを動かすために使っていないか、見直す必要がある。子ども自身が安心して見通しを持って生活できるためのツールであることを、支援者は忘れてはならない。

① 環境を整える

何をする場所か見てわかるように、目印をつけたり、空間を間仕切りで分けたりすることで、安心して自発的に取り組める姿が見られる。



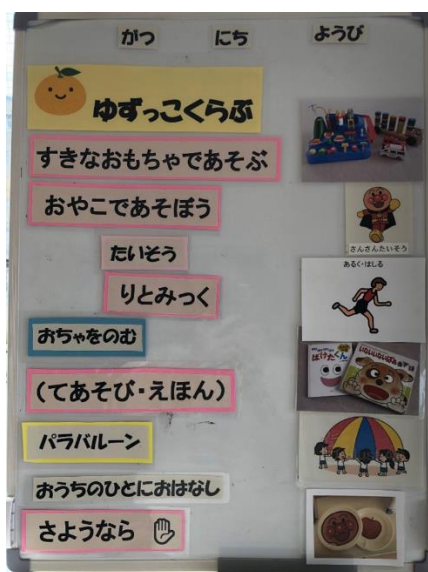
間仕切り

★イスの片付け



②活動の流れをスケジュールで予告する

子どもにより文字でわかる、写真でわかる、実物を見て今から何があるか分かるなど、それぞれの発達段階によって理解できる予告の仕方は異なる。一日の生活の流れを文字と写真等で視覚的にスケジュールとして掲示することで、子どもが見通しを持って安心して生活できるとともに、大人の指示がなくても自分で“見て”“わかって”自発的に行動にうつせることで、動きを止められたり叱られたりすることなく、大人も子どもも落ち着いてすごせるのである。



★一日のスケジュールを見やすい所に掲示

また、行事や外出など普段と違う時は、いつもに増して丁寧な予告をすることが子どもの不安を軽減するために大切なことである。その中でも、“終わり”を明確にすることで、“いつまで”かがわかり、より安心して過ごせるのである。



★掲示したものを縮小して手持ち用に

③ よい行動に注目してほめる

発達が気になる子どもは、表現方法が未熟

だったり相手の表情を読み取るのが苦手だったりして、愛情表現としての行動がいたずらと捉えられて叱られることがある。大人は叱ってもその行動が減らないので、周りの大人がしんどくなる、といった状況が見られることが多い。叱る行動ばかりに注目してしまいがちだが、ほめる場面をどう作り出すか、あえて注目される場面を作り出し、ほめることを大人が意識していくことで、子どもの自尊心が育ち、ほめられたいから「もっとやってみよう」という意欲が育っていくのではないか、と思う。

ほめる時のポイントとしては、望ましい行動ができた時に子どもの目を見て、名前を呼びながら、具体的に短くわかりやすくほめるということである。例えば子どもにとってわかりやすい“ハイタッチ”や“拍手”などである。信頼する大人と喜びを共感していくことで、ほめられてうれしいという気持ちを育てていくのではないかと思う。

【保護者の思いを考える】

○こんなに大変なのに・・・

支援の必要な子どもの保護者の思いはわかりにくいこともある。園からすれば、こんなに大変なのに、保護者からは何も言ってこない、なんとも思っていないの？と疑問に思うこともあるかもしれない。家での様子は見えにくく、家では困っていないのか、それとも特別な支援がいることを受け入れたくないのか、伝わってこないこともある。

しかし、本当は保護者も気になっているが、あえて話題にしないようにしているのもし

れないし、気になる行動が毎日で、諦めてしまっているのかもしれない。保護者も困っているからこそ、園から寄り添うような話しかけや協力し合うような体制、意識を持って接することで協力し合える関係を築いていける。

○支援が必要な子どもの保護者支援とは

子どもは一人では生きていけない、養護性の高い存在である。だからこそ、保護者の考え方がダイレクトに影響したり、家庭環境や社会環境の影響をうけやすいのである。

また、支援の必要な子どもは子育ての手応えが感じられず介入を嫌がる、関わっても反応がないなど、保護者からすればつらい状況である。だからこそ、障害があると診断を受けてからではなく、もっと早い段階からの支援、育児支援が必要であり、子どもの適切な生育環境を整えるためには、親だけでなく家族全体の支援が不可欠となってくる。そのためには、支援者は保護者の目線にたって、困りごとに寄り添い、共感し、受容することが大切である。「保護者はこう思っているかもしれない」という“かもしれない”目線にたって考えることが、保護者に寄り添う第一歩かもしれない。

○家族への支援

保護者が子どもの特性や困り感を理解し、それぞれの家庭に合った子育ての工夫を通して家族みんなが生活しやすくなるためには、まずは丁寧に話を聴くこと（傾聴）である。その上で、そのご家族にとって無理がなく、取り組めそうなことをともに考え、保護者が決定する過程に寄り添うことが大事である。

また、保護者が一人で悩まないように、保護

者同士の交流や情報提供の機会を保障するとともに、保護者自身が主体的に子育てに向き合えるよう支援することが、私達支援者に求められることである。

そもそも「支援」とは、障害をなくすこと、レッテルをはるのではなく、子どもが生き生きと、安心してすごせる環境をどう作り出していくかを考えることが「支援」であると考えられる。

【さいごに】

支援が必要な子どもであっても、子どもが自分の人生の主人公になり、主体的に生きていくためには、以下のことを大事にしていきたい。

- ・自分は安全で、愛され、気にかけていると感じる安心感（養育者との愛着、信頼）
- ・自らの意思決定や主張が自分の生活を左右するという経験（意思形成と効果的な表出）
- ・好きなこと得意なことがあり、喜びや幸福を感じる（達成感、成功体験→自己有能感）
- ・自分のことが好きで信頼できる

（自己肯定感）

- ・自分のことを認識し、セルフコントロールできる（自己統制力、自律）

また、私が大事にしている言葉で「子どもに“寄り添う”」という言葉がある。“寄り添う”とは、子どもの思いを慮る（どう感じてる？）そして子どもの目線に立ち、一緒に子どもの世界を感じるのだと考えている。

そうすることで、子どもは自分のことを理解され、受け止められているという安心感が育ち、支えられる中でいろいろなことに目が向

き、チャレンジしようとする。

子どもの人生が豊かになり、幸せに暮らしていけるように、私達のかかわりがその子の将来につながっていることを自覚して、丁寧に寄り添っていきたいと思う。

付記：

この論文は、令和2年度特別保育研修にて発表したものを、加筆修正したものである。